

鹿児島県の都市集中と周遊観光の価値形成

唐鎌若菜

陸の玄関口が存在する鹿児島市と空の玄関口が存在する霧島市の観光の特性を比較し、それぞれの観光形態がどのように観光地の価値形成に有効なのか明らかにすることを目的とした上で「鹿児島県の都市集中と周遊観光の価値形成」という研究テーマを設定した。

2つの観光形態の特性を比較することで、観光客の行動やその影響を分析し、新たな観光プランの開発や観光資源の有効活用に貢献できるといえることが本研究の意義である。

霧島市はどう鹿児島市と棲み分けて、観光客数を増やすことができるのか、という問いを設定し調査を行った。この問いに対し、アクセスの利便性が必要な周遊と各地の文化体験について鹿児島市に譲り、霧島市はアクセスの良さを求められない温泉滞在型の〈ウェルネスツーリズム〉を伸ばしていくことが望ましいという仮説を設定し、明らかにする。

仮説を証明するために、鹿児島市の周遊型観光と霧島市の滞在型観光の実態と温泉を中心とした観光スポットの分布を比較した。

まず、鹿児島市の観光実態に関しては鹿児島市の観光施設〈仙巖園〉の職員である脇元氏にヒアリング調査を行った。次に〈カゴシマシティビューバス〉という周遊バスを筆者が利用して調査した。一方、霧島市では温泉エリアの一つである霧島神宮温泉郷近隣の観光スポットを訪問した。さらに国分高等学校の生徒による霧島市の観光プランに関する研究を調査した。

得られた結果として、まず鹿児島市の観光形態について、アクセスの良好さと文化体験を活かした観光が主流であることが確認された。特に、カゴシマシティビューバスを活用した周遊型観光が確立されており、市街地の繁華街や桜島、錦江湾などの名所を効率よく巡ることができるプランが整っている。文化体験を活かした観光施設としては仙巖園が多くのプランを提供していると考えられる。

一方、霧島市では、霧島神宮温泉郷を中心に温泉地が観光資源として活用されていることがわかった。観光地は温泉郷を中心とするエリアに集中しており、観光客は温泉や自然を楽しみながら食事や景観を楽しめる環境が整っている。しかし、霧島市には二次交通の課題があり、観光地を巡る周遊型観光の推進が難しいという点が明らかになったといえる。

この結果、本研究の仮説が証明された。

今回、鹿児島県の陸の玄関口と空の玄関口が存在する二つの市を通して研究を行った。しかし、鹿児島県には他にも多く市町村や離島が存在している。本研究では鹿児島県の観光客数に特に影響を与えられと考えられる鹿児島市と霧島市のみ対象に絞り、研究を行ったことが今後の研究における課題であるといえる、より本研究を信頼性の高い研究にするべく、離島やその他市町村の観光形態に関する研究を行いたいと考えている。